論考

童話がよく語られていた時代
――口演童話と幼児教育の関係

中村美和子
（大学院生）

日本ならではの子ども文化「口演童話」

書店や図書館には多様な絵本、童話の本が並び、ＩＴ機器で童話コンテンツをダウンロードできる現代では想像しにくいが、童話といえば「口演童話」を指した時代があった。大正期から昭和の初め頃である。

口演童話は「ストーリーテリングの古い形」とひとまず説明できる。書かれた童話でなく語られた童話を意味するが、幼稚園や保育所、図書館などで今、「おはなし」として実践されるストーリーテリングや素話とは形態がかなり異なる。第一の特徴は規模の大きさで、講堂や寺社、野天、公会堂などの広い会場に数百人から千人ほどの子どもたちが集まって楽しむ催しだった。だが、当時はマイクロホンや拡声器があったわけではない。そのため第二の特徴には、雄弁術的に話す技術と視覚に訴えるジェスチャーが研究された点が挙げられる。さらに第三として、舞台に立つ話者のほとんどが男性で、背広にちょうネクタイ、羽織はかまなど、改まった身なりで語った点があり、複数の記録が残っている。

口演童話は、マスメディアが行きわたって

中村美和子（なかむらみわこ）
お茶の水女子大学大学院博士後期課程在学。紙芝居、子どもの本などの編集を経て、社会教育指導員として勤務しながら児童文化、教育文化の研究に取り組む。

いない二十世紀前半に人気のあった、日本独自のスタイルを持つ子ども文化である。本稿では口演童話と幼児教育のかかわりに注目し、童話を語るとはどういうことか、どういう語りが望ましいとされたのかを確かめてみたい。

口演童話の広がり

口演童話の普及は、巌谷小波（一八七〇‐一九三三）、岸辺福雄（一八七三‐一九五八）、久留島武彦（一八七四‐一九六〇）ら創始者の活躍によるところが大きい。巌谷と久留島は、巌谷が編集に当たった少年雑誌の読者サービスで全国のあちらこちらを実演して回った。巌谷ら三人衆に学ぶ追随者たちも次々と現れた。口演で生計を立てる「童話家」もいた。

「口演童話」という言葉――これは草創期から使われていたわけではない。児童文学者の巌谷がまとめたお伽噺（とぎばなし）がよく語られたため、明治期、大正初期には「お伽口演」という呼称が用いられていた。「お伽噺」が「童話」に置き換えられたのは、月刊誌『赤い鳥』の一九一八年創刊、小学校高学年向け雑誌『童話』の一九二〇年創刊後のこと。[注1] 昭和に入り、文字で書かれた童話と区別するため、「口演童話」という語が定着していく。

時代を下ると、口演童話は「大衆童話」に変容する。ウケを狙って話す童話家が過分な謝礼を求め、口演童話は批判にさらされる。その一方で、教育者や師範学校生が研究会に集まり、子ども会の開催、話材の検討、機関誌発行などに励んだ。個々の教育現場での実践も熱心に行われたといわれている。

幼稚園を拠点とした童話の研究会

三人衆の一人、岸辺福雄は兵庫県の師範学校時代、すでに学童相手にお伽噺をしていたという。一九〇三年には、東京府牛込に東洋幼稚園を開き、儒教の智、仁、勇思想に基づ

く保育に取り組む。[注2] 岸辺は「桃太郎」の話を得意とし、元気で快活、勇敢さと思いやりを併せ持つ桃太郎を理想とした。体育主義の厳しい教育に泣きだす子には、「桃太郎は、泣きません」と声掛けをした。[注3]

岸辺はこの東洋幼稚園に、童話研究会「喃々会」の拠点を置き、毎月一回の定例会で修身童話、幼児童話を研究した。岸辺は一九〇九年に『お伽噺仕方の理論と実際』（明治の家庭社）、一九二四年に『童話の実際とその批評』（丙午出版社）を出版する。後者は、一九〇五年にアメリカで発表されたサラ・コーン・ブライアントのストーリーテリングに関する図書の訳を含むことで注目される。

三人衆の一人、久留島武彦は児童文化への貢献だけではなく、ボーイスカウト活動を日本に普及させた国際人としても傑物である。一九一〇年、東京府の青山穏田に早蕨幼稚園を創設し、翌年、童話研究会「回字会」を結成する。久留島は童話の口演、文部省嘱託としての児童問題・婦人問題の海外調査などで旅が多く、幼稚園は夫人任せだった。早蕨幼稚園も東洋幼稚園と同じく、桃太郎的な子どもを育成する意識が強く、バッジや卒園証書が桃太郎グッズであった。[注4] 回字会は月一回の久留島の在京時に定例研究会を開き、名古屋、福島県小名浜はじめ全国に支部もあった。

こうした研究会で口演の力をつけ、情報や人脈を得た参加者たちが自分でも会を発足させる場合もあった。また、全国のほとんどの師範学校にも童話研究会が結成された。子どもに日々語りかける教育実践者たちにとって口演童話は、保育や授業の技術を高める上でも、学び合う仲間を得て教育者としての器を広げる上でも、大きな働きを果たしたと言える。そして童話の語りは、話者が話し方の技術と自身の人格を通して、子どもにどうあってほしいのかを伝えるメディアとして機能す

るものだとわかる。

岸辺と久留島は倉橋惣三と親交があり、『幼児の教育』第五十四巻第七号「倉橋惣三先生追悼号」（一九五五年七月）に回想を寄稿している。岸辺が講演上手の倉橋に、大会場で童話を話さないのはなぜかと尋ねたところ、「それは君の領分だよ」と言い返されたこと、しかし、岸辺の童話集への批評は深刻であったことが記されている。『幼児の教育』デジタルアーカイブズでは、倉橋の童話論が複数読める。倉橋もまた、口演童話家たちとの学び合いで、子どもに語る童話がどのようなものであれば望ましいのか、自身の考えを深めていたのではないだろうか。

子どもに語る童話を研究した人々

口演童話の大衆化の問題については先に触れた。昭和期に小学校教師として活躍した金沢嘉市（一九〇八・一九八六）が、大きな会場で聞く口演童話にはそもそも限界があると指摘している。子どもが大会場で童話を聞くと群衆心理が形成されて個性が消え、皆が同じ心持ちになってしまう。[注5] そこで金沢は、一人ひとりが静かに話を聞き、静かに内省できる童話実践の充実を論じ、仲間の教師たちと「教室童話研究会」（一九三八年結成）に集い、研究や活動に取り組む。[注6]

幼児教育の分野では、内山憲尚（一八九九・一九七九）が、幼児の生活にとって日常的な談話に注目し、「幼児童話」の言葉遣い、ジェスチャー、話材の一年間の配当案などに関する研究をまとめた。[注7] 内山は口演童話家として全国を巡り、童話集をはじめ、童話の話し方、童話教育、童話理論に関する著書を数多く残した。編者を務めた『日本口演童話史』（文化書房博文社　一九七二年）の巻頭言に「口で話すものは消えやすい」と記した通り、同書は、子どもの文化史に一時代を築いたにもか

かわらず今にほとんど伝えられない口演童話について、かろうじて記録を留めた文献である。口演童話の研究には欠かせない基本図書で、本稿もまた多くを同書によっている。

内山は一九四四年に聖美幼稚園園長、戦後間もない一九四七年には東京都私立幼稚園協会を組織して初代理事長となり、翌年には全国保育連合会事務局長、日本私立幼稚園連合会初代理事長に就いた。幼児にとって童話は生活そのものと受けとめていた内山は、童話家と呼ばれる専門家ではなく、親や幼児教育者が童話家であることが望ましいと説いた。

小学校教師と幼児教育者という違いはあるが、童話の語りに意識的だった金沢と内山には共通点が見受けられる。まず、子どもの心の発達に意識的で、心の栄養となる童話を提供していく必要を論じたことである。次に、話材として日本昔ばなし、グリム童話集、アンデルセン童話集など昔から伝えられている物語を挙げている点である。そして、リズム的な表現の活用を望ましいとする点である。

二人が盛んに童話を語っていた時期は、一九三七年に日中戦争が始まり、教育の国家主義化が一段と進んでいた。そのような背景の中、教育の現場で指導的立場にあった金沢と内山が、子ども一人ひとりの心の育ちを尊重していたことは注目に値する。そして、子どもたちの心の栄養になるものとして、古くから伝承されてきた童話を選んで語っていた点も押さえておきたい。その選択の根底には、民族の生活の中で育まれてきた言語が世界を構成するのであり、伝承の話には民族的精神が含まれるという考えがある。

第三の共通点として挙げたリズム的な表現とは、いわゆるオノマトペである。内山は「擬声」「模声」と整理し、前者にカアカア、ワンワンという鳴き声、物売りの声、後者にトントンという音の模倣、ピョンピョンという動

作の模倣、ドロドロ（の道）という感じの模倣を例示する。話に変化を与え、子どもに興味を持たせるものとして擬音の働きを捉えている。金沢嘉市もまた、低学年児童が反復のリズムを好む点を指摘する。

ここまでたどってきたように、童話の口演は発達の過程で変遷を重ねながら、語り手たちによって教育的要素が検討され、語りの技術が工夫されてきた。そして、語り手と聞き手さえいれば実践できる口演童話は、物資が不足した戦時下において、例えば疎開先のような場所で重宝に用いられた。[注6] 他の子ども文化より手軽に国策に貢献できた歴史は戦中・戦後世代に批判的に扱われ、口演童話の担い手たちは生前のうちに過去の到達を評価される機会を失った。

口演童話の歴史的評価は一九八〇年代から進んできているが、解き明かされていない点はまだ多い。子どもへの生活文化の伝承という意味において、童話の語りはさらに注目され研究され、議論されてよいテーマである。

参考文献

1 内山憲尚『童話学入門』東京文化研究所　一九五七年
2 内山憲尚編『日本口演童話史』文化書房博文社　一九七二年
3 上笙一郎・山崎朋子「児童文学と幼な子たち」『日本の幼稚園』理論社　一九六五年
4 前掲、上・山崎「児童文学と幼な子たち」
5 金沢嘉市「教室童話への二三の所感」『教室童話』二巻三号　青山講話会　一九三九年
6 金沢嘉市「私と口演童話」野村純一ほか編『ストーリーテリング』弘文堂　一九八五年
7 内山憲尚『幼稚園・託児所談話法』東洋図書　一九四〇年
8 上地ちづ子「口演童話の方法と思想」日本児童文学学会編『児童文学の思想史・社会史』東京書籍　一九九七年